

## 執筆項目 1 教育目標等の具体的な表現による明示

### 問題点・改善点

「真理を謙虚に追求」という青山学院の教育方針と「人類への奉仕をめざす自由で幅広い学問研究」を行うという大学の理念のもとで、各学科の専門性に立脚した個々の目標を設定している。少人数教育を軸とするゼミナールなどによって、学生一人一人が人間と文化の多様な営みを理解すること、そのための資質を形成することを教育の目的としている。また、文学部共通科目などを設定することによって、各学科の学問領域の特徴を基礎としながら、同時に学科横断的に人文学の素養を高めることを目的としている。

### 1. 具体的な状況・背景

各学科の教育目標は、以下のように設定されている。

#### <英米文学科>

英米文学科では、英語の運用能力を徹底的に鍛える教育を行っている。この能力を基にして、イギリス文学・文化、アメリカ文学・文化、グローバル文学・文化、英語学、コミュニケーション、英語教育学の6つの専門分野について理解を深め、自ら研究を行い、社会に貢献する能力を養うことができるように指導している。

#### <フランス文学科>

フランス文学科では、物事を適切に判断し幅広い考え方をすることができる人間的魅力に富んだ人材を育むことを目指す。そのために、ヨーロッパにおける人文学の精髓を伝統的に培ってきたフランスの文学、言語学、文化を深く学ぶ。そのためには同時に確かなフランス語運用能力を身につけることも大きな目的となる。

#### <日本文学科>

日本文学科では、日本語・日本文学についての総合的な理解を基礎に、自ら考え学ぶことのできる力を具え、国際的視野のもと社会に貢献できる堅実な人材の育成を目標としている。

#### <史学科>

史学科では、地域やジャンルをこえて幅広く歴史を学び、今日の世界情勢や文化を総合的客観的に分析できる人材、歴史の研究を中心とする専門的知識の習得を通して自己を確立し、未来への展望を切り開ける人材を社会に送り出すことを目的としている。

### 2. 現在までの対処状況

#### <英米文学科>

英米文学科では、英語の運用能力については4技能を総合し、主にネイティブ・スピーカーの教員が教授するIE (Integrated English) プログラムを設置している。第二部英米文学科にはネイティブ・スピーカー教員によるコミュニケーション・イングリッシュを設置している。また、英米文学科、第二部いずれも英語テキスト読解の授業を設置して、正確な読解力の養成を行っている。専門分野の教育については、グローバル文学・文化、英語教育学の2つの分野とコースを創設し、多様化する専門知識の要求に応えることとし、2010年度からイギリス文学・文化、アメリカ文学・文化、グローバル文学・文化、英語学、コミュニケーション、英語教育学の6分野のいずれかに学生が所属するコース制

を導入し、分野ごとの教育目標をこれまでより一層明示的に示すことになった。

#### <フランス文学科>

フランス文学科では、文学を中心に広くフランス文化に触れることによって、先入観にとらわれず、主体性を持って判断することのできる、豊かな人間性を備えた人材を育成することを目指しており、その目標をおおむね達成している。充実したカリキュラムにより、高いフランス語運用能力を持ち、フランス文化への深い造詣に裏打ちされた教養あふれる人材が輩出している。

#### <日本文学科>

日本文学科では、人間を多面的・多角的に理解する人材の養成という文学部の教育目標を世界の中で日本を見渡すという立場から担っている。学科の目標を教員配置、コース制、カリキュラムなどを通じて具体化するとともに、常にその確認・検証を行っている。

#### <史学科>

史学科では、上記の目的を達成するために、日本史、東洋史、西洋史、考古学、芸術史の各コースを設置し、幅広い領域の中からより専門的な内容を学びながら、同時に多様な地域や時代の特徴、考古学や芸術史に固有の方法も学ぶことを可能にしている。

### **3. 今後の対処方法・課題**

#### <英米文学科>

現在、英米文学科では、英語テキスト読解の授業の目標をさらに整理し、明示化すること、2010年度をもって学生募集を停止した第二部英米文学科在籍の学生に、引き続き充実した学習内容を保障することを課題としている。

#### <フランス文学科>

フランス文学科では、フランス語、文学、文化を学ぶことの意義をさらに明確に示す必要があると認識している。

#### <日本文学科>

日本文学科では、学科として目指す総合性、国際性をさらに具体的なものにして、本学の日本文学科として社会の中で果たす独自の役割をより強化してゆくことが課題である。

#### <史学科>

史学科の場合にもグローバル化の進展の中で、歴史学の方法や領域の変化に対応した内容の精選、その意義の一層の明確化などが課題となるであろう。

## **執筆項目 2 「受入れ方針＝アドミッション・ポリシー」に基づく入学試験の実施・運用**

### **問題点・改善点**

入学試験のあり方は、文学部各学科がどのような学生を求めているかを示すものであり、それぞれの学科は学問領域の特徴を生かしながら、学生の受け入れ方針を明示し、公正な試験制度を構築、運用してきた。また、学生の多様化に対応して、推薦入試制度やセンター試験の導入など入学試験の複線化を進め、AO入試による多様化につとめてきた。もちろん、それらの制度には完全なものはなく、

時代状況や大学の置かれている環境、また、各学科が積極的にどのような学生を求めるかという理念の中で検討が不断に行われるべきものである。

## **1. 具体的な状況・背景**

### **<英米文学科>**

英米文学科では、生活や文化、価値観、考え方の違う世界の人びととの共生を通じて社会に貢献できる人材の育成を目標とする。この目標を実現するため、多様なバックグラウンド、資質、個性を持つ学生を積極的に受け入れている。

### **<フランス文学科>**

フランス文学科では、多種多様な受験生を受け入れ豊かな人間性を持つ人材の育成を目指しているため、従来から入試種別の多様性に格別な配慮を行っている。中心となるのは、一般入試（A方式、B方式）と指定校推薦入試であるが、これに加え、外国人留学生も若干名受け入れている。さらに多様な学生を受け入れることを目指して2008年度入試より、大学入試センター試験利用入試を取り入れることとした。

### **<日本文学科>**

日本文学科は、日本語・日本文学に深い関心を持ち、その理解を通じて人間の真実を探求し社会に貢献する意欲を持つとともに、高い読解・表現力を有する入学生を求めている。また多様で個性あふれる入学生、特に、高い文章読解力と文章表現力を有する入学生を積極的に受け入れている。

### **<史学科>**

史学科でも多様な受験生を受け入れるため、入試の多様性に配慮してきた。一般入試（A方式、B方式）に加え指定校推薦入試を行うとともに、外国人留学生も受け入れている。また、推薦入試制度では面接を重視し、多様な背景をもつ学生を入学させるよう配慮している。

## **2. 現在までの対処状況**

### **<英米文学科／フランス文学科／日本文学科／史学科>**

各学科の入試制度は一般入試に加え、多様な推薦入試などを導入し、さまざまなバックランドをもつ学生の入学に配慮している。それらは、指定校推薦、青山学院高等部からの内部推薦、青山学院女子短期大学からの推薦編入学、編入学・転部・転学部・転学科・学士編入などであり、受入れ学生の多様化を実現している。多様な学生がいること自体が、個性を發揮して、切削琢磨し、充実した学生生活の中で学業をおさめるステップであると考えているからである。また、各学科ではその専門領域の特徴によって、入試制度も多少の違いがある。さらに、2010年度入試より、全学部日程の入試形態も導入してより多くの受験機会を提供している。

### **<英米文学科>**

英米文学科では、一般入試では1996年以降AとBの二方式を導入し、B方式では特に英語の運用能力に秀でた学生の選抜に実績を残している。帰国子女入試は2010年度をもって廃止し、代わって英語資格取得者自己推薦入試を導入するとともに、引き続き外国人留学生入試を行い、外国の生活や文化の経験者を積極的に受け入れている。また、第二部英米文学科は2010年度入試をもって、編入学・転部・転学科入試を除いて募集を停止した。

### **<フランス文学科>**

フランス文学科では、求める学生像をより明確にするため、2010年度入試より、論理的思考力と文

学的感性にとくに優れた者を見出すことを目的とする B 方式入試の論述試験について、長文の読解力を試すための読解問題の比重を増やし、読解問題と論述問題を半々の割合とし、試験時間についても、従来の 150 分から 120 分に短縮した。また、受験機会の多様化を図るという意味で、従来同日に実施されていた、A 方式、B 方式の試験を別々の日程に分散することにした。他方、学科の求める学生像をより明確にするため、2011 年度入試より、帰国子女、スポーツに優れた者の入試種別を廃止することとなった。

#### <日本文学科>

日本文学科では、一般入学試験では 3 教科による A 方式に併せて、外国語と国語（2 教科分）による B 方式も行い、また国語または日本語能力を重視した推薦・特別入学試験なども行っている。

#### <史学科>

史学科では、さらに多様な学生を受け入れることを目指して 2008 年度入試より、大学入試センター試験を取り入れた。また、2009 年度からは自己推薦入試を導入した。このうち、自己推薦入試は、歴史に関する小論文を課題として課し、同時に試験と面接によって周到な選考を行うものである。その含意は、歴史学に強い関心を持つ学生を入学させたいということにある。

### 3. 今後の対処方法・課題

#### <英米文学科／フランス文学科／日本文学科／史学科>

各学科とも、推薦入試の一つである指定校推薦入試制度に関しては、毎年分科会で指定校の見直しを行い、入学実績や入学後の学生の追跡調査の結果等に基づき、指定校の削除、追加などを随時行っている。他方、高い意欲と能力を持った帰国子女・外国人留学生の入学生を受け入れるためには、十分な広報活動が必要である。

## 執筆項目 3 「学位授与の方針＝ディプロマ・ポリシー」に基づく学位授与と質保証

### 問題点・改善点

文学部各学科の間で学士号の授与に関してはその要件（必要単位、卒業論文など）に違いがある。これらはそれぞれの学問領域の状況を反映したものであるが、教養科目や語学も含め、一定の共通基盤が青山スタンダードとして設定されており、同様に、学科ごとに基盤となる基礎的なスキルが設定されている。

これらの習得を通じて学生の学力や資質の向上をはかり、大学学部卒業にふさわしい能力の涵養をはかってきた。学問の高度化や社会的なニーズの変化の中で、従来とは異なった学力観が求められていることも事実であるが、同時に、学問体系の歴史に立脚しながら基礎的なスキルを重視し、それを改編していくことも必要であろう。

### 1. 具体的な状況・背景

#### <英米文学科>

英米文学科では、英語の実際的運用能力およびこの能力を社会的に活用する能力を有する学生に

「学士（文学）」を授与する。

#### <フランス文学科>

フランス文学科では、1年次よりフランス語の運用能力を身につけるために極めて有効なプログラムを組み、その履修の上に学士（文学）を授与する。

#### <日本文学科>

日本文学科では、日本語・日本文学に関する知識を体系的に習得して広い視野を手に入れ、また問題解決力と高い日本語能力と豊かな感性を身につけた学生に学位を授与する。

#### <史学科>

史学科では、歴史学や考古学、芸術史の基礎的な理解の上に、地域や時代にそくした研究手法を学び、そうした基盤的なスキルを応用しながら卒業論文を作成する。こうして身につけた学力や資質に対して学士（歴史学）を授与する。

## **2. 現在までの対処状況**

卒業にいたる学生の学力や資質の保証という意味では、学習達成度の判定と認定が必要であるが、各学科ともさまざまな対応を行っている。

#### <英米文学科>

英米文学科では、英語の実際的運用能力を育成するためにIE(Intensive English)およびReading、Academic Writing、Academic Skillsの諸プログラムを配置し、1・2年次配置の専門導入的な科目群によって運用能力を補完し向上させている。運用能力を社会的に活用する能力は6つの分野の専門科目群で養成される。各科目群とも厳正な達成度判定を行っている。さらに、2010年度より6つの専門分野ごとに英米文学科としてのコース修了認定制を導入した。これは、どのような専門知識を通じて英語の実際的運用能力を社会的な活用に結びつけていくかを、学生がよりよく自己把握できるようにし、また英語運用能力を社会的に活用する能力についての質保証を学科として行うことを目的としている。

#### <フランス文学科>

フランス文学科では、1・2年次必修科目においては全学生を対象に一律の評価基準で成績を出している。3・4年次の必修科目「演習」では、それまで身に付けたフランス語や文学、文化に関する知識をさらに深めるとともに、優れたプレゼンテーション能力やコミュニケーション能力を培うことを目指しており、専任教員の努力と学生同志の切磋琢磨によってこの目的を実現している。

#### <日本文学科>

日本文学科では、概論・演習・講読・特講を体系的に履修させている。演習は複数分野の履修を必修とし読解・発表・表現力など総合的に評価している。400字詰め原稿用紙50枚以上の卒業論文を課し、問題解決力、読解・表現力の総仕上げを行っている。

#### <史学科>

史学科では、コースを横断する複線的なカリキュラムにもとづき、基礎的な内容から専門的な内容への橋渡しを行い、同時に地域や時代にそくした史資料の読解や文献の講読を通じて、歴史的な手法、また考古学や芸術史に固有の手法を学び、これをもとに卒業論文を作成する。卒業論文の課題は学生自らが設定するものであり、以上の過程を通じて学力を身につけ、自ら考える能力を養成することを意図している。

### **3. 今後の対処方法・課題**

#### **<英米文学科／フランス文学科／日本文学科／史学科>**

各学科とも、2012年度に予定されているキャンパス再配置にともなう教育課程の再編に合わせ、カリキュラムの見直しを進めている。また、学生の活字離れや、パソコンによる文章執筆の一般化の中で、学術的文章執筆能力をさらに高めるための教育環境の整備と、多様な表現力を養い評価する方法の模索が文学各学科の共通の課題である。

<b>執筆項目 5 「教育課程編成・実施の方針＝カリキュラム・ポリシー」に基づく具体的なカリキュラム構成</b>
--

#### **問題点・改善点**

カリキュラムには、文学部各学科の基礎となる学問領域の内容、その特徴、基盤的な手法が明示されている。すなわち、カリキュラムには各学科の理念が示されている。科目名として演習という名称が冠せられていても、基礎的な演習と卒業年度の演習や卒業論文では内容にも学問的なレベルにも大きな違いがある。すなわち、各学科は、個々の専門性を基礎としながら、専門科目の中で初歩的な内容からしだいに高度な内容の学習へとその科目間の連関性を意識したカリキュラムを設定している。また、その背景にはさまざまな学問的歴史があるが、学問領域をとりまく変化や時代状況の変化のなかで改変が必要とされるものもある。

#### **1. 具体的な状況・背景**

##### **<英米文学科>**

英米文学科では、英語の運用能力を高めることを目標として英語科目群を、この運用能力を社会的に活用する能力を獲得することを目標として6コースに分けて専門科目群を配置し、同時に、ふたつの能力を連結し総合することを目標として専門科目への導入の役割を担う科目群や、1・2年次からの専門科目群を適切に配置している。

##### **<フランス文学科>**

フランス文学科のカリキュラムは、1・2年次でフランス語の基礎的な運用能力を身につけることを目指し、3・4年次でフランス文学、語学、文化の専門知識を深めることを目指している。

##### **<日本文学科>**

日本文学科では、総合的に日本語・日本文学を理解・研究し、これを通じて普遍的な人間性を探究することを方針にカリキュラムを編成している。3年次からは、「文学・語学コース」「日本語教育コース」の2コースに分かれ、それぞれに専門的な科目を履修する。

##### **<史学科>**

史学科では、初年度に、日本史、東洋史、西洋史、考古学、芸術史の入門的な授業を配置し、学問体系を理解しながらしだいに専門的な内容に学習を進めていくことが可能なようにカリキュラムを配置している。また、2年次の基礎演習では基盤的なスキルである史資料の読解やフィールドワークの基礎を学び、それをふまえて専門的な学習を行えるよう配慮している。

## 2. 現在までの対処状況

文学部の専門科目を学ぶ基礎として、青山スタンダード科目・外国語科目の履修の上に、各学科の科目や科目群、学科の学修成果の関係としては以下のような特徴があげられる。

### <英米文学科>

英米文学科では、Integrated English I～III、IE Seminar A・B で、4 技能を総合的に学び、英語運用能力を習得し、英語によるコミュニケーション能力を習得する。Reading I・II、Academic Writing、Academic Skills では、英語のテキスト読解能力、論理的文章の作成能力を習得する。他に、1・2 年次配置のスピーチコミュニケーション I など計 3 科目、3・4 年次配置のスピーチコミュニケーション II など計 14 科目では、英語の運用能力、コミュニケーションスキルをさらに向上させる。また、基礎演習、英文法で、6 コースに分かれた各専門科目への導入的知識を獲得し、英語のテキスト読解能力、発表技能を習得する。

1・2 年次配置の専門科目（イギリス文化概論など計 14 科目）では、6 コースに分かれた各専門分野の基礎知識を獲得する。3・4 年次配置の専門講義科目（イギリス文学特講など計 37 科目）では、6 コースに分かれた各専門分野の知識を深化させる。各専門分野の知識を基に人間を多角的・多面的に理解する。同時に、3・4 年次配置の専門演習科目（計 34 科目）では、6 コースに分かれた各専門分野の知識を確認する。また、テキスト読解の深い能力を習得し、発表能力や文章作成能力を習得するとともに、共同的作業の能力を習得する。

第二部英米文学科の科目においても、科目名称と科目の年次配置は異なるものの、科目と期待される学修成果の関係は英米文学科に準じたものとなっている。

従来から、学士課程と研究科課程との連携を深めるため学士課程の学部学生のなかで資質があり熱意を持つ者には、研究課程への進学を勧めるようにしているが、必ずしも充分とはいえなかった。2010 年度より「大学院特別科目履修」の制度を発足させ、学部 4 年生で意欲ある者に大学院の授業の受講が可能となるようにした。対象となるのは 3 年次終了までに卒業要件単位の 90%以上を取得し、3 年次終了時の英語科目、専門科目の GPA2.8 以上の学生であり、志望者には試験を課して合否を判定する。

### <フランス文学科>

フランス文学科では、1 年次必修の「文法」で、クラス担任も兼ねる専任教員が担当し、大部分の学生にとっては初習外国語であるフランス語の真髄を伝えるべく力を尽くしている。同じく必修の「フランス語会話 I」では、CALL 教室を利用した「双方向型の授業プログラム」を謳っており、ネイティブ・スピーカーによる生きたフランス語にじかに触れ、日常生活に困らない程度の実用的なフランス語力も同時に身につくよう工夫されている。2 年次では、クラス担任も兼ねる専任教員が担当する「速読」を始めとする 6 つの必修科目でフランス語の総合的なレベルアップを目指している。3・4 年次では、専任教員が担当する「演習」でそれぞれの専門に関する知識をさらに深めるとともに、高度なプレゼンテーション能力やコミュニケーション能力を培う。また、各分野の専門家による「特講」や「講読演習」で最先端の研究成果に触れることで、高度な文学的・文化的教養を獲得することを目指す。

なお、学部と大学院の連携を深めるため、大学院進学説明会を実施するとともに、大学院生の研究発表会を学部学生にも開放して、聴講を促している。また、2010 年度より、学部学生による、大学院科目特別履修制度を開始した。3 年次の 3 月に資格試験を実施している。出願資格は、3 年次終了時に卒業要件単位を 90%（116 単位）以上修得し、学科科目（フランス語科目、専門科目）の GPA が

2.6 以上であること。2010 年度において、この制度を利用している学部学生は 2 名である。

#### <日本文学科>

日本文学科では、1・2 年次には、学科全体の必修科目「文学研究法」「日本文学史」などの専門教育科目において、日本文学科での学びの目的を自覚しその方法を習得するとともに、青山スタンダード科目において幅広い知識を身につける。3・4 年次には、専門教育科目の講義科目において専門的な知識を蓄え、演習科目において専門的なテーマに関する情報収集・読解・分析・発表・討論を行って、感性を磨くとともに論理的思考力・問題解決力・表現力を高める。また文学部共通科目において、世界の言語・文学・文化についての多様な視点を学ぶ。4 年次に日本文学科での学びの総決算として卒業論文を作成する。

日本文学科のカリキュラムの特色は、古代から現代までの日本文学・日本語学・日本語教育学・中国古典文学（漢文学）と、日本語・日本文学に関わる全ての領域に互る専門教育科目を配置していることである。また「文学・語学コース」を選択した場合にも、日本語教育を「副専攻」として学ぶことができるようになっている。専門教育科目では、オーソドックスな研究方法を通じて、着実に論理的思考力・問題解決力・表現力を高めるとともに、視聴覚芸術やメディアを論じる「表象文化論」も配置し、芸術と社会に対する関心を深め、問題発見力を高めていることも特色である。

学士課程のカリキュラムを通じて身につけた総合的体系知識と基本的研究方法を前提に、文学研究科日本文学・日本語専攻のカリキュラムを組み立てている。学士課程の次のステップとして研究科課程に進めるようになっている。学士課程と研究科課程の連携についての制度的な整備については、現在検討段階にある。しかし、積極的に大学院生を TA として学部設置科目に参加させ、また学部設置科目の履修を認めている。大学院生の指導やアドバイスを通じて、学部学生が研究科課程の研究と教育に具体的に触れることができる機会を設けるようにしている。

#### <史学科>

史学科の場合、2 年次に履修する基礎演習は、基盤的なスキルを学ぶための入門的な内容になっている。しかし、近年では学生の基礎的な学力、あるいは漢文を履修しない場合があるなど、基礎演習の内容には従来とは異なった配慮が求められるようになっている。また、コンピューティングが学問的な方法に着実に導入された結果、そうしたスキルへの配慮も必要になっている。基礎演習では以上のような問題にも配慮した学習内容を扱っている。そのため、通年で行われている現在のカリキュラムを見直し、学生が基礎演習を複線的に履修することが可能なものとすることも検討中である。

史学科の大学院との接続、連携に関しては、大学院授業科目の受講を可能にする特別履修制度を実施しており、学部学生への周知を含めいっそうの活用をはかることが必要である。

### **3. 今後の対処方法・課題**

#### <英米文学科／フランス文学科／日本文学科／史学科>

各学科ともキャンパス配置の再編という状況の下で、少人数教育による効果的な授業の設定やカリキュラム策定に向けて、現在準備を進めている。また、この面では学部と大学院のさらなる連携が必要であろう。また、英語やその他の外国語能力のいっそうの向上や学際化・国際化に対応できるようなカリキュラムの再編成が必要である。

## 執筆項目 6 適切な履修指導の実施

### 問題点・改善点

近年の一般的な傾向として、就職活動のスタートが早まったことによって、学部教育は大きな困難に直面している。適切な履修指導という場合、第一にこの問題をあげる必要がある。しかし、この問題は学部単独で解決ができるものではなく、大学教育をめぐる企業や社会との関係の中で議論されるべきである。

しかし、こうした傾向の中で、なるべく低学年のうちに多くの単位を取得しようとする傾向があり、この点は、文学部の各学科の対象学問は積み上げ型のものであることが多いことから、これに適切な指導を行うことが必要である。また、履修の困難な学生が見られるようになったことも問題としてある。

### 1. 具体的な状況・背景

各学科では、学年に応じて丁寧な履修指導を実施することに努めている。

#### <英米文学科>

英米文学科では、学年初頭行事として毎年4月に英米文学科、第二部英米文学科ともに、複数の担当教員がすべての学年ごとの履修指導を行っている。毎年12月には、複数の担当教員が2年次生を対象に演習の履修登録説明会を行っている。大学刊行物である『授業要覧』『講義内容』『授業時間割』のほか、学科刊行物である学科パンフレット、青山学院大学英文学会の刊行物である『会報』等により、学生の履修計画に必要な情報を提供している。

#### <フランス文学科>

フランス文学科では、専任教員による年度初頭の履修ガイダンスに加え、2年次の12月に全専任教員によるゼミガイダンスを行い、それぞれの学生に最適の演習が選べるように配慮している。

#### <日本文学科>

日本文学科では、年度初頭に学年ごとの履修ガイダンスを開くほか、学生にきめ細かに指導できる体制を整えている。

#### <史学科>

史学科では、学科教務委員1名のほか、各コース（日本史・東洋史・西洋史・考古学・芸術史）別に教務担当委員を置き、必要に応じて柔軟に対応できる体制をとっている。具体的な履修指導については、年度初頭に、各学年別に授業履修の方法、授業の概要などを説明しているほか、1年次の秋には、次年度のコースわけ（史学科では、2年次より日本史・東洋史・西洋史・考古学・芸術史の各コースを選択する）に備えて、各コースの特徴・授業の概要等につき説明している。2年次秋には、ゼミ登録に備え、各ゼミの特徴などのガイダンスを実施している。

### 2. 現在までの対処状況

#### <英米文学科>

英米文学科では、専任教員がオフィス・アワーを設けて個別の履修上の相談に応じている。また、毎年3月に「単位僅少者個別面談」を行い、履修上の困難を抱えた学生に複数の担当教員が助言と指導を行っている。

### <フランス文学科>

フランス文学科では、1・2年生については、相模原キャンパスの合同研究室を訪ねてくる学生の質問に専任教員が随時対応する体制となっている。3・4年生については、「演習」での発表等の相談に、学生が自由に専任教員の研究室を訪れて指導を受ける。また、「卒論」の指導については、さらに学生個人のニーズに柔軟に応じている。

### <日本文学科>

日本文学科では、年度初頭の学年ごとの履修ガイダンスで、学修目的と履修方法を説明している。また履修中は、1年次生は「文学研究法」のクラス、2・3年次生は演習、4年次生は特別演習を単位に、担当教員が随時面接指導を行っている。

### <史学科>

史学科では、学生の個別の学習習得状況について、学科研究室の研究支援事務助手などと連携し情報を収集した上で、分科会などを通じて教員間で状況把握、認識の共有を行い、少人数教育であり学生と緊密に接する基礎演習・演習などを通じて個別に対応している。また、3年次の演習や必修である卒業論文の指導を通じて個別的な指導を行っている。

## 3. 今後の対処方法・課題

### <英米文学科／フランス文学科／日本文学科／史学科>

就職活動の早期化は大きな問題であるが、他方、全学科に共通する利点として、2012年度以降はキャンパス再配置に伴い、従来相模原キャンパスで学んでいた1・2年生が青山キャンパスで学ぶことになるため、上級生による学習支援も視野に入れて指導を行うことが可能となろう。卒業後の進路も視野に入れながら、学習意欲を高めてゆく工夫が今後さらに必要である。また、履修や学習の上で困難を抱える学生に対して、各教員の個別対処から学科として組織的な対処をはかるため、より細やかな学生の修学状況の調査を進めていく必要があると思われる。

## 執筆項目 7 入学前・入学時における入学生に対する教育への配慮

### 問題点・改善点

多様なバックグラウンド、資質、個性を持つ学生を積極的に受けいれていることのメリットの反面、入学時の学力や学習意欲には、入試種別ごとにかなりのばらつきのある場合がある。これは、学科ごとに特徴があり、一概に論じることは困難であり、個々の学生の外国語の学習環境などの違いに起因する問題だと考えられる。

### 1. 具体的な状況・背景

#### <英米文学科>

英米文学科では、B方式入試や帰国子女入試によって入学した学生をその他の学生と比較すると、IEプログラム等において勝り、青山スタンダード科目、概論系、講義系科目において困難を経験することが多いことなどがあげられる。

### <フランス文学科>

フランス文学科においては、フランス語を初めて学ぶ学生が大半であるため、ほとんどの者がいわば同じスタートラインについているという意識からか、入学者の学習意欲は極めて高い。とりわけ、指定校推薦入試制度を利用して入学する学生に対しては、11月に行われる入試の面接時に、専任教員が入学後のフランス語学習についての心構えを説き、入学前に読むべき書物等について助言を行っている。

### <日本文学科>

日本文学科では、現在のところ入学者の学力や学習意欲に大きなばらつきは見られない。ただし選抜方法の違いに合わせた教育配慮は必要と思われる。

### <史学科>

史学科でも入試制度の多様化に伴い、入学者の学力には若干のばらつきが見られるが、特に配慮を要すると思われるのは各種推薦入試による入学学生であると考えられる。

## **2. 現在までの対処状況**

### <英米文学科>

英米文学科では、IEプログラム等においては習熟度別のクラス編成を前提として制度設計を行った。また、そのためのプレースメントテストを実施している。Reading等の英語クラスにおいても、習熟度別の要素を取り入れたクラス編成を検討課題と認識している。2010年度入試をもって海外帰国子女入試を廃止し、代わって英語資格取得者自己推薦入試を2011年度から導入して海外での学習経験が長い入学者の入学時学力の維持に努めるとともに、こうした学生の日本語での学習・研究能力開発支援を検討課題と認識している。

### <フランス文学科>

フランス文学科では、学習意欲を高い水準で保つためにも、核となる科目「文法」、「文法演習」においては、前・後期試験に加え、頻繁に書き取り試験や達成度評価試験を行うことで、学生の学力を高めようとしている。また、1・2年生のフランス語科目の担当者が、連絡ノートなどを通じて緊密に連絡を取り合うことで情報を共有し、学生の学力を高め、意欲を高く保つよう努力している。さらに、「文法」、「文法演習」に関しては、TA（教育補助員）による語学補習授業が週2時間設けられ、授業についていけない学生が出ないよう特別に配慮されている。専任教員が執筆した味わい深いコラムを満載した『ブックガイド-文庫で読むフランス文学-』もまた、フランス文学の魅力を分かりやすく紹介することで、入学者の学習意欲を高めるために一役買っている。

### <日本文学科>

日本文学科では、推薦入学試験による入学者には、入学前に複数の課題図書を指定し読書感想文の提出を課している。入学者全員にアンケートを行い、学力や学習意欲についての情報を得ている。

### <史学科>

史学科では、推薦入学などで入学する学生に学科で指定した課題図書を読ませ、そのレポートを提出させている。これによって、専門図書の読解方法や論理的文章の書き方などの入学後必要な能力の向上を図っている。レポート提出後、一定基準に満たない学生に対しては、基準に合格するまで再提出させるなど、入学後も指導を続けており、一定の効果を得ている。

### **3. 今後の対処方法・課題**

#### **<英米文学科／フランス文学科／日本文学科／史学科>**

各学科に共通する課題として、専任教員がそれぞれの専門分野についてわかりやすく話す授業を設けることで、入学者の学習意欲をさらに高めるなどの努力が必要であろう。

#### **<フランス文学科>**

フランス文学科では、フランス語既習者により適した教育プログラムの開発が継続課題である。

#### **<日本文学科>**

日本文学科では、日本語・日本文学を学ぶのに必須の「日本史」の知識の乏しい入学生への教育配慮が必要となろう。

## **執筆項目 8 初年次教育の方針や取り組み内容**

### **問題点・改善点**

高等学校の教育内容の変化の中で、基礎的な学力の欠如した学生の入学も問題となっている。文学部の場合にも、例えば、史学科の学生でもすべての学生が高等学校の日本史と世界史を学んだ経験があるわけではないという問題に直面している。これらは、各学科とも同様の問題を抱えており、学習への動機づけも含め、初年次教育には配慮が必要となっている。

### **1. 具体的な状況・背景**

#### **<英米文学科>**

英米文学科では、学習の動機づけ、友人・教員との人間関係の確立、精神的健康の維持等を重要問題と捉え、学科内の要覧委員会、IE委員会、英語科目検討委員会等を中心にして学科全体で検討している。

#### **<フランス文学科>**

フランス文学科では、講義科目「フランスの文化と社会」を全1年生に履修させることで、大学での専門教育への円滑な導入を行い、これから学ぶことになる分野の全体の見取り図を魅力的に提示することで、学生の期待感を高めている。

#### **<日本文学科>**

日本文学科では、初年次教育を、高等学校の国語学習から専門教育に進んでゆくための、極めて重要な段階と位置づけている。

#### **<史学科>**

史学科では、初年次教育としては、年度初頭の学科主催オリエンテーションが挙げられる。これでは、入学生への学科に対する個別の質問に答えたり、学生間での交流を深めるためのレセプション、在校生の代表による学科紹介などを行い、スムーズな大学生活への移行を促している。

## **2. 現在までの対処状況**

### **<英米文学科>**

英米文学科では、青山スタンダード科目の「フレッシュャーズ・セミナー」に積極的に出講している。従来初年次教育の重要な一環であった専任教員担当の基礎演習が、1年次への履修科目の集中を避けるなどの理由のため2010年度カリキュラムからは2年次配置に変更となった。このため、相模原キャンパス学務グループ、相模原キャンパス学生相談センターなどと従来にもまして緊密な連携を取っていくことが必要であると認識している。

### **<フランス文学科>**

フランス文学科では、1年次の自由選択科目「基礎演習A」では、少人数制のプレゼミ形式をとり、ある特定のテーマについて深く調べ考察した内容について、ハンドアウトを作成してわかりやすい言葉で発表するという、大学ならではのプレゼンテーション技術やコミュニケーション技術が学べるように特別に配慮している。

### **<日本文学科>**

日本文学科では、1年次に、学修の動機づけとなる資料収集方法の教授、基礎的な読解訓練、発表形式の体験を行う「文学研究法」(4クラス)、日本文学に関する知識を体系的に習得する「日本文学史」(古代・中世)を配置している。

### **<史学科>**

史学科では、授業科目として史学概論や日本史概説などの各コースの基礎的知識を学ぶ授業を1年次に配置し、専門的な学習の準備とし、大学における学習モチベーションを高め、専門教育への橋渡しとなるようなカリキュラムを用意している。

## **3. 今後の対処方法・課題**

### **<英米文学科／フランス文学科／日本文学科／史学科>**

各学科共通の課題として、2012年度に予定しているカリキュラム改革により、少人数クラスで行う授業を増やすことで、初年次教育の効果をさらに高めることがある。

### **<日本文学科>**

日本文学科では現在「文学研究法」は機械的にクラス分けをしているが、学生の関心に沿った開講方法や内容も検討する必要がある。

### **<史学科>**

これと同様の関心は史学科でも共有されている。史学科の将来を検討するワーキング・グループを設け、問題の把握、対処方法の検討を進めている。例えば、2012年度のキャンパス再配置に向け、早期に大学生活になじめるよう初年次のクラス編成などが検討されている。

<b>執筆項目 9 授与する単位の実質化への方策</b>
------------------------------

### **問題点・改善点**

「1単位の授業科目を45時間の学修を必要とする内容をもって構成することを標準」とする学則第

36条の規定を基礎としながら、授業内容の精選と同時に学生の自主的な学習意欲を喚起することを通じて、学問内容の理解にとどまらず、より発展的な学習の基礎を提供し、そうした単位の実質化の重要性を共有するよう努力している。

## **1. 具体的な状況・背景**

学科によって特徴のある問題もある。

### **<フランス文学科>**

例えば、フランス語は、ほとんどの学生にとって初習外国語であるため、フランス語科目の履修には、予習、復習に多くの時間をかけることが不可欠であることを学生に認識させることが、教員の責務である。学生に予習、復習の習慣を身に付けさせるために、教員はさまざまな工夫をこらしている。

### **<史学科>**

史学科では、卒業要件として卒業論文の作成を必須としており、その作成のためには、幅広い問題感心と文献・史料調査が必要であり、それは、卒業論文作成のための「特別演習」のみならず、3年次及び4年次の演習での自主的な学習が必須となっている。

## **2. 現在までの対処状況**

### **<英米文学科>**

英米文学科では、IEをはじめとする必修の英語科目においては、単位取得のためにインテンシブな予習と復習が必要であることは明らかである。学科卒業要件を選択必修44単位、コース修了要件をコース指定科目20単位とする専門科目の単位規定は、各科目についての自学自習時間の保障に配慮して定められたものである。中でも演習系科目においては、頻繁な課題の提出や成果の発表と教員からのフィードバックによって単位の実質化が十分に保障されている。

### **<フランス文学科>**

フランス文学科では、1・2年次必修のフランス語科目では、ほぼ毎時間小テストが実施されるため、学生は、教室以外での自習時間を確保することを余儀なくされる。これに加え、CALL教室を利用した自習プログラムを整備している。3・4年次の専門科目では、演習の発表のための準備や、レポートや卒論の作成にかかる時間には際限がないとも言える。

### **<日本文学科>**

日本文学科では、授業のための予習、および学修内容を確認・発展するためのレポート作成を課している。特に2・3年次の演習と4年次の特別演習では十分な事前準備（資料収集・読解・分析・討議）と発表後の発展研究を課している。

### **<史学科>**

史学科では、講義科目については、学生へのアンケートなどにより各担当教員が学生の学習状況を把握する体制をとっている。これによると、演習及び史料講読（原典講読）等の授業では、学生の研究発表を中心としているため、事前の学習時間は確保されていると考えられる。一方、講義科目の事前学習時間については、学生の自主性による状況となっているのは否めないところがある。

## **3. 今後の対処方法・課題**

### **<英米文学科>**

英米文学科の概論・講義系の科目においては組織的な教育法の点検・見直しの余地があると考えら

れる。なお、過剰な科目履修を防ぐため各学年の最高履修制限単位をそれぞれ 48、44、44、48 と定めている。

#### <史学科>

史学科の場合、講義科目については、学生の自主的な学習のために課題を課すなどによる単位の実質化をはかることが検討されている。同時に講義科目履修者の少人数化、もしくは教育補助のため現在も行われているティーチングアシスタント制度の一層の充実が必要となる。

#### <英米文学科／フランス文学科／日本文学科／史学科>

各学科の共通の課題として、学生が自発的に学ぶ姿勢を持てるよううまく誘導するスキルを教員側も磨く必要がある。特に講義科目の単位の実質化をさらに強化するために、各教員が開発してきた教育方法を学科として共有することが課題である。また、単位の实質化のためには、学生に自学自習のスペースを大学内で保障する図書館および各学科合同研究室の設備の更新と充実が基礎的な条件であると考えている。

### 執筆項目 10 授業評価アンケート結果の組織的な活用

#### 問題点・改善点

文学部の各学科は、いずれも大学全体が運営・実施している「授業改善のための学生アンケート」を授業改善のために利用している。利用のあり方はまちまちであるが、この背景には、文学部の場合には、少人数教育を軸としたゼミナール形式の授業が多いなどの形態の特徴もその背景となっている。

但し、各学科とも学生の授業などへの出席や予習・復習への動機づけの一環として大学全体、学科によってはそれに加えて独自のアンケートを実施している。その内容は、HP などを通じて学生にも公表され、学生の科目履修の際の情報の一つとなっている。

#### 1. 具体的な状況・背景

##### <英米文学科>

大学の運営・実施する「授業改善のための学生アンケート」によれば、英米文学科の科目は、2009年度前期ではすべての評価項目で「全科目平均」を上回っているが、「成績評価の明確さ」が他の評価項目より多少評価が低い。また、2009年度後期（全科目平均はなし）では、「授業のわかりやすさ」、「授業の速度と話し方の適切さ」、「黒板等の使い方の適切さ」などの評価項目が他の評価項目よりやや評価が低い。学科内の英語科目検討委員会等でアンケート結果を共有し、それに基づく授業の改善方法の検討を行っていくことが考えられる。また、「英米文学科科目トータル」の評価アンケート結果の数値を、学生ポータルサイトで学生に公開している。なお IE 科目については、「授業改善のための学生アンケート」に従来から IE プログラム独自で行っていたアンケートの調査項目を付け加えた調査を実施し、その結果を IE 担当の専任教員コーディネーターが集約したのち授業担当教員にフィードバックして授業改善に資している。

##### <フランス文学科>

フランス文学科では、大学全体で行っている「授業改善のための学生アンケート」に参加しており、

その結果は、大学のホームページで学生にも公開されている。2009年度について述べるならば、「教員の熱意」、「授業の総合評価」ともに高い評価を得ており、各項目についてバランスの取れたチャートを描いている。ただし、「黒板の使い方の適切さ」や「授業の速度と話し方の速度の適切さ」については若干平均値が低く、改善の余地があると考えられる。大学全体のアンケートに加え、1・2年次のフランス語科目については、学科独自のアンケートを行っている。これは、フランス語が大学に入って初めて学習する科目である場合が多く、独自に学生の状況を検討する必要があるからである。また、3・4年次の専門科目「演習」においては、統一的なアンケートを行うという形ではなく、教員と学生の直接的なコミュニケーションによって学生の要望や感想を汲み上げ、授業改善に向けた努力を行っている。

#### <日本文学科>

日本文学科では、大学全体で行っている「授業改善のための学生アンケート」に参加し、概論・講読・特講の改善に役立っている。なお、少人数教育を行う演習では、アンケートは行わず、学生から直接意見を求めるようにしている。

#### <史学科>

史学科では、大学全体で行っている「授業改善のための学生アンケート」に参加し、授業改善に役立っているが、アンケート結果を組織として検証する体制は十分ではない。その背景には、対象とする学問領域が日本史・東洋史・西洋史の全時代から考古学・芸術史にいたる多彩な広がりを持つため、手法の違いも大きく、その結果、演習などの形式もかなりの違いがあるため、画一的な検証が困難であることがある。

## 2. 現在までの対処状況

#### <英米文学科>

英米文学科では、専任教員を中心に「授業改善のための学生アンケート」をもとに、授業のわかりやすさ、学習意欲の向上などに努めている。また、非常勤講師に対しても、履修者の動向などをもとに、その選任についても意見交換を行っている。

#### <フランス文学科>

フランス文学科では、全員で、アンケート結果を検討し、問題のある授業形態、教員についての情報を把握し、当該者に改善を促している。フランス文学科独自に行っているアンケートでは、各授業で用いている教材についての学生の意見も尋ねているため、教材開発のヒントとしてもおおいに役立っている。

#### <日本文学科>

日本文学科では特にクラスサイズについて、次年度カリキュラムを立案する分科会において確認・検討し、対応策を立てている。「授業改善のための学生アンケート」の結果は大学 HP で学生に公開している。アンケートや、演習において得た意見に対して、必要な場合には授業等で回答している。アンケートの結果の公開の方法、およびそれに基づく学生との意見交換の方法については、日本文学科としてさらに今後検討を進めたい。

#### <史学科>

史学科では、1年次のコース選択と2年次のゼミナール選択の際に、全学生にアンケートを実施している。そこに各コースの「概説」などの必修科目への感想も反映されており、アンケートの結果は分科会で共有し協議している。その際には、学科アンケートの結果も参照され、それにもとづき学生

の感想・要望を丁寧に把握する試みを行っている。

### **3. 今後の対処方法・課題**

#### **<英米文学科／フランス文学科／日本文学科／史学科>**

全学ベースの「授業改善のための学生アンケート」を踏まえながら、教員と学生が協同してよりよい授業を作るためのシステムを文学部ないしは各学科として考える必要があるだろう。アンケート結果をよりよい教材作りのために活用することも継続課題である。

なお、現在実施されているアンケートは、大教室での受講者が多い授業とゼミナール形式の授業の質問項目が同一であり、授業改善のためにもその形式に修正の余地があると考えられる。

## **執筆項目 11 義務化されている FD 活動への具体的な取り組み**

### **問題点・改善点**

各学科とも、大学教育をめぐる環境の変化、時代状況の変化の中で、学生の基礎的な学力をめぐる問題が顕在化しつつある。その背景には、教養体系の変化、問題関心の多様化もあり、そのために FD 活動の整備が重要となってきている。

### **1. 具体的な状況・背景**

#### **<英米文学科>**

英米文学科では、IE プログラムに関して、毎年 4 月に IE プログラムのコーディネーター（2 名）が中心となって IE 担当教員全員を対象とする IE Program Orientation を開き、IE 以外の英語科目については、英語科目検討委員会が主催し、担当教員全員を対象とする「英語科目教員打ち合わせ会」を開いて、それぞれ授業改善のための情報共有と意見の交換を行っている。またこうした会議にとどまらず、IE プログラムのコーディネーターと英語科目検討委員は、日常的に情報の収集と授業内容改善の責務を担っている。専門科目については、6 分野の教員が分野ごとに会合を持ち、同様の情報共有と意見の交換を行う仕組である。また、専任教員全員が青山キャンパスと相模原キャンパスの双方にオフィス・アワーを設けて、学生から直接質問を受け、意見を聞く機会を制度的に設けている。

#### **<フランス文学科>**

フランス文学科では、専任教員の総力を結集して、学科に最適な教材開発に努めている。

#### **<日本文学科>**

日本文学科では、FD 活動の重要性を意識しながらも、現在その基礎的整備を検討している段階にある。

#### **<史学科>**

史学科では、学科に設置したワーキング・グループを中心に大学教育をめぐる環境や時代状況の変化の中で、基礎的な教養教育、必要とされる語学の内容などの議論を行っている。このことは、学生の基礎的な学力をめぐる問題に関連しており、FD 活動に関連した課題を取り上げることにもなっている。

## **2. 現在までの対処状況**

### **<英米文学科>**

英米文学科の IE プログラムにおいては、リスニングセッションについての問題点が学生と教員の双方から指摘されてきたのを受け、2009年度から Active English Listening Program というウェブ双方向利用の新授業方式を成功裏に導入することができた。また、この新方式のスムーズな導入に際しては、上記 IE Program Orientation が大きな役割を果たした。「英語科目教員打ち合わせ会」は、リーディング科目、ライティング科目の教材等について、教員の意見や要望と学科の方針のすり合わせや、共通認識の形成に大きな役割を果たしている。双方とも、学科内の会議などで各種資料に基づいてつねに報告が行われ、学科全体で情報を共有している。

### **<フランス文学科>**

フランス文学科の具体的成果として、2005年度には、1年生の講読用のテキストを作成し、2007年度、2008年度には、それぞれ「会話 I」、「エクспレシオン・オラル」用の教材を開発して、高い教育効果をあげている。また、「速読」に関しては、各担当者がこれまで扱ったテキストを電子ファイルとして、学科のコンピュータに蓄積し、情報の共有を図っている。本学科に最適な1年生の文法教科書を作成することが当面の課題である。

### **<日本文学科>**

日本文学科では、分科会や臨時に設けられたカリキュラム小委員会で、教育方法のあり方や改善に向けた情報交換と議論を随時行っている。また教員が一致協力して国際シンポジウムの連続的に開催することなど通じて、教員団の職能開発も進めている。

### **<史学科>**

史学科では、ワーキング・グループを中心にその検討を進め、とくに、各教員が直面している学生の学習上の困難にかんしての情報交換を行っている。これは生活面とも密接にかかわるため、おのずと課題の検討は学生の授業への取り組みなどを問題とせざるを得ず、こうした情報交換は FD 活動としての役割を担っている。

## **3. 今後の対処方法・課題**

### **<英米文学科／フランス文学科／日本文学科／史学科>**

各学科とも FD 活動によって示された問題点を教員間で共有し、授業内容・方法の改善を効果的に進めるためのシステム作りを進めることが今後の大きな課題である。

## **執筆項目 12 シラバスの掲載内容の充実**

### **問題点・改善点**

文学部各学科のシラバスに関しては、学科や教員の間で記述の内容に精粗が目立ち、授業計画などについても、十分な情報が提供されていない場合があった。この点に関しては、大学基準協会の認証評価の過程でも改善の助言を受けている。文学部の各学科は、以上の助言を受けとめシラバスの掲載内容の充実のためにさまざまな努力を行っている。

## 1. 具体的な状況・背景

### <英米文学科／フランス文学科／日本文学科／史学科>

文学部全体として、シラバスの内容の充実に努めている。これは、学部教授会において学部長から各学科や各教員に対して、シラバス作成の意図や学生の学習環境の中でのその重要性についての指摘がなされた結果であり、各学科はその意をうけてさまざまな努力を行っている。

### <英米文学科>

英米文学科では、以上を受けて、再度、シラバス作成の方針・構成などについて文書による詳細な依頼を専任教員・非常勤教員に対して行っている。また、専門科目については各専門分野の専任教員が、非常勤教員に対して同様の要請を行うこともある。専門科目では分野ごとに教員が頻繁に会議を行い、分野内での教育内容の一貫性と整合性をつねに維持・向上させることに努めるとともに、シラバス作成についても統一性の向上と内容の充実に目指している。Integrated English では、IE 担当教員が、英語科目では英語科目検討委員会が、それぞれ定期的に非常勤教員を交えた会議を開いて、シラバス作成方針について統一をはかっている。

### <フランス文学科>

フランス文学科では、シラバス作成に先立って学科会議において討議の上、基本方針を定めた後に、1年次のフランス語科目5科目、および2年次の専門科目「速読」、「エクспリカシオン・オラル」などについて、科目ごとにシラバスの内容を統一して、具体的な記述に努めている。年数回開催されるカリキュラム小委員会において、学科構成員間で、授業内容の確認を行うのはもちろんのこと、非常勤講師も含めた関連分野担当者間の連携を深めるため、毎年定期的に教科書打ち合わせ会を開催し、それぞれの担当科目について授業内容の確認を行っている。

### <日本文学科>

日本文学科では、シラバス執筆依頼の際に、教員（非常勤を含む）にシラバスの意義を周知徹底し、到達目標・テーマ、授業計画については具体的でわかりやすいものとなるように努めている。

また、4クラス開講される「文学研究法」、また4科目必修の「日本文学史」（Ⅰ～Ⅳ）については、時間割を決定する時点で、これらの科目の理念を再確認するようにしている。また担当者間で必要に応じて情報交換を行い、内容を統一性（文学研究法）・一貫性（日本文学史）あるものにするように努力している。

### <史学科>

史学科では、歴史的な手法を中心とする日本史、東洋史、西洋史の領域と考古学、芸術史ではおのずと授業の組み立て方が異なるため、各コースの特徴を生かし、コースごとにシラバスの内容を調整している。その際には、コースを中心に前近代史と近現代史の授業科目の内容の調整を進めるなどのシラバスそれ自体には直接反映されない調整も進めている。

## 2. 現在までの対処状況

各学科を中心に進めたシラバスの改善の結果、その内容は従来に比べて充実した内容となっている。

### <英米文学科>

英米文学科では、2010年度版『授業内容』では、ほとんどすべての教員のシラバスが、形式的に統一され、記載内容も十分に具体的で、学生の履修判断や事前学習の資料となるものとなっている。

### <フランス文学科>

フランス文学科では、授与単位の実質化を達成するため、予習の大切さを強調し、また、小テスト、

書き取り試験、達成度評価試験など、学生が自学自習するための動機づけを具体的に設定している。

#### <日本文学科>

日本文学科では、シラバス改善の結果、到達目標・テーマ、授業計画の記述が詳細で具体的なものとなり、内容的にも質的にもほぼ均等なものとなってきている。

#### <史学科>

史学科では、シラバスにおいて成績評価方法の明示につとめており、その中では事前学習などの必要性を強調している。これは、演習的な科目においてとくに顕著であり、史資料の正確な読解や文献の理解、研究発表のための資料の作成などがそれに該当する。こうした内容への丁寧な言及を心がけている。

### **3. 今後の対処方法・課題**

#### <英米文学科／フランス文学科／日本文学科／史学科>

文学部の各学科共通の課題として、授業計画が具体的に示されていないシラバスについては、改めることが必要である。どうしても教員間で記述内容に差が残る場合があるが、項目のうち、例えば、成績評価についてはより明示的で統一性な記述が必要である。さらに充実に努めたい。

## **執筆項目 13 教員の教育業績に対する取り扱い**

### **問題点・改善点**

各学科とも、教員の教育業績については、教員が大学の「研究者情報」に記入するにとどまっている。

### **1. 具体的な状況・背景**

#### <英米文学科／フランス文学科／日本文学科／史学科>

従来の教員の業績評価は、研究業績を中心としており、教育にかかわる内容は、担当科目などで示されるにとどまっていた。その結果、各学科とも、教員の教育業績については、教員が大学の「研究者情報」に記入するにとどまっている。

### **2. 現在までの対処状況**

#### <英米文学科>

英米文学科では、英語科目検討委員会、IE委員会が毎年定期的な教員の会合を開催し、教育情報の交換を行い、個々の教員の教育業績の向上に努めている。また、教育業績を教員新規採用や昇任の際重要な審査項目のひとつとして位置づけている。

#### <フランス文学科>

フランス文学科では、1・2年次のフランス語科目の担当者間で連絡ノートを経由して、互いの教育努力を可視化するよう努めている。とりわけ、「速読」については、担当者が選び、作成した独自の教材を電子ファイル化して、学科のコンピュータに蓄積することで、教育業績ファイルの共有を行って

いる。また、カリキュラム小委員会を定期的開催し、よりよいカリキュラムの実現に向けて討議するとともに、授業に関する意見交換を行いFDの実質化に努めている。また、卒業論文の試問は、専任教員間で互いの指導方法について学び合う貴重な機会ともなっている。

#### <日本文学科>

日本文学科では、短歌実作を行う演習の履修者から公的団体での受賞者も出ており、また「日本語教育コース」では授業をビデオに記録するなど、独自の教育業績は確実に蓄積されている。

#### <史学科>

史学科では、各教員の教育評価を実施する体制はできていない。その背景には、歴史学や考古学、芸術史は実際には手法に大きな違いがあり、教育業績に関してもこれを統一的な基準で整理するのは困難だからである。しかし、教育成果業績の明示法や建設的な相互批判のシステムを構築することは教員の教育力を判断する基準として重視されるべきであろう。その一環として、分科会などで各教員が担当する学生の活躍の状況を報告し、情報の共有化を図るとともに、優秀な学生への評価、また、指導教員への評価を共有する努力を行っている。一方では、学生に研究方法を明示し、同時に、コンピューティングなどのスキルを明示するため、PPT資料をネット上から提供し、同時に、スキルの解説書を作成している教員もいる。

### **3. 今後の対処方法・課題**

#### <英米文学科／フランス文学科／日本文学科／史学科>

新しく教員を採用する際に、これまで以上に、教育への熱意も考慮に入れるべきであろう。蓄積されている教育業績を学科として共有するとともに、対外的に提示してゆく具体的方法を模索したい。特に採用人事の際は、候補者との面接、模擬授業、推薦状他の第三者評価をもとに教育実績を判定することも考えられる。

## **執筆項目 14 成績評価基準の厳格化・統一化**

### **問題点・改善点**

各学科とも、シラバスにおいて、定期試験、レポート、授業参加の度合いなどの成績評価に関わる項目を明示している。初回授業時にも同様の内容を周知している。ほとんどの科目については、成績評価基準がシラバスに明確に記載されている。少数の例外をなくすことが課題である。

### **1. 具体的な状況・背景**

#### <英米文学科／フランス文学科／日本文学科／史学科>

各学科とも、シラバスにおいて、定期試験、レポート、授業参加の度合いなどの成績評価に関わる項目を明示している。

#### <フランス文学科>

フランス文学科では、「文法」、「文法演習」に関し、2003年度より共通テスト方式を導入し、成績評価の客観性、厳格性を確保することに努めている。

### <日本文学科>

日本文学科では、科目の特性に応じてさまざまな形で成績評価を行っている。教員間の共通理解を前提に、各教員が評価の方法を工夫している。

## **2. 現在までの対処状況**

### <英米文学科>

英米文学科の場合、同一名称の科目を複数の教員が担当する際の授業レベル、成績評価基準の統一等の問題がある。IE プログラムにおいては IE コーディネーター、IE 委員会、その他の英語科目においては英語科目検討委員会が定期的に非常勤講師を含めた会議を開き、授業レベル・成績評価基準の統一をはかっている。

### <フランス文学科>

フランス文学科では、「文法」、「文法演習」については、前・後期定期試験（共通テスト方式）に加え、年 4～5 回実施の達成度評価試験、各課終了時に行われる書き取り試験の結果を、成績集計表に入力し、1 年生全員の成績を共通の基準に基づき算出している。この方式については、シラバスに記載するとともに、初回の授業で詳しく説明している。

### <日本文学科>

日本文学科で 4 クラス開講される「文学研究法」は、学科で講義内容についての共通理解があり、成績評価も定期試験の他、小テスト・発表などほぼ同じ形式で行っている。評価の基準については今後一層の組織的な調整が必要である。

### <史学科>

史学科は、日本史・東洋史・西洋史・考古学・芸術史の 5 コースに分かれ、各コースもさらに時代ごと、地域ごと、テーマごとに専門が分かれている。扱う史料やその扱い方も異なっており、教員の多彩さもあいまって、それぞれの専門家によってその教育方法や成績評価の基準を画一的にとらえることは困難である。但し、コース内を中心とする成績評価の基準の厳格化については、相互の緊密な打ち合わせを行って、これを十分に確保している。また、卒業論文にかんしては、学科として複数の教員による厳密な審査と口頭試問を実施し、卒業時における学生の質の確保に留意したものとなっている。

## **3. 今後の対処方法・課題**

### <英米文学科／フランス文学科／日本文学科／史学科>

GPA 制度導入に伴う学部内開講科目の成績基準統一についての取り扱いの問題がある。これは、学部全体、全学レベルの検討と連動しながら各学科で検討を継続したいと考えている。

## **執筆項目 15 学生個人ごとの学習履歴や学習成果の把握**

### **問題点・改善点**

各学科とも少人数教育を志向し、学生個人を単位とするきめ細かな学習指導を重視している。

## **1. 具体的な状況・背景**

### **<英米文学科／フランス文学科／日本文学科／史学科>**

各学科とも、学生個人の学習履歴等の把握に関しては、個人情報の保護に配慮しながらも、その都度学務部教務課の資料を申請して入手し、使用している。

## **2. 現在までの対処状況**

### **<英米文学科>**

英米文学科では、学生個人への学習指導体制として、1・2年次の基礎演習、3・4年次の演習を専任教員が担当し、学生とのコミュニケーションをはかりつつ、個々の学生の学習上の問題について助言・指導を行っている。オフィス・アワーの制度化も同様の趣旨である。また、毎年3月に複数の担当教員が「単位僅少者個別面談」を行い、特に大きな問題を抱えた学生との相談に当たっている。

### **<フランス文学科>**

フランス文学科では、「文法」、「文法演習」に関し、1年生全体を対象とした成績集計表を作成し、学生個人の学習成果を把握できる体制を整えている。2年次必修の専門科目「速読」に関して、毎回の授業ごとに、書き取り試験を実施し、課題の提出を求めている。そのため、学生個人の1年を通じた学習成果、達成度が一目でわかる成績集計表が各担当教員によって作成されている。

### **<日本文学科>**

日本文学科では、1年次生は「文学研究法」のクラス担当者、2・3年次生は演習担当者、4年次生は特別演習担当者が、学生個人の学習状況を把握し、指導を行っている。演習・特別演習は少人数のため、きめ細かな学習指導を行うことができている。

### **<史学科>**

史学科では、指定校推薦入試による入学者については、成績の追跡調査を行い、推薦入試対象校指定の判断材料にしているが、その他の学生については、個人ごとの学習履歴や達成度の管理は、これをコースごとに行っている。また、史学科の場合、2年次の基礎演習から4年次の卒業論文作成に至るまで、3年に渡って、原則として同一の教員が10名程度の学生をゼミナールにおいて一貫して指導するので、各学生の習熟度は相当程度把握されている。

## **3. 今後の対処方法・課題**

### **<フランス文学科>**

フランス文学科では、1年生についてはTA（教育補助員）による補習の時間が週2回設けられているが、これを他の学年にも広げることが課題である。

### **<日本文学科>**

日本文学科では、4年間を通じての個人単位の学習履歴や達成度などの記録は現在作成していない。2012年度からのキャンパス統合という好条件を活かして、学年を超えた指導体制を整えたい。

### **<史学科>**

史学科では、コースを単位として学生の状況を把握することが一般的であった。これは、学生の履修科目、演習などを通じていわば「一人一人の顔が見える指導」を行ってきたことになるが、一方ではますますこし制度化して、学科を単位とした枠組みを検討する必要もあるかもしれない。

## 執筆項目 16 学科・専攻の目指す国際化と取り組みの現状

### 問題点・改善点

大学全体のイメージとしては国際化に積極的に取り組んできたかのように見られることが多いが、実際にはその取り組みは十分とはいえない。但し、大学基準協会からの助言の中には、文学部への特段の言及はなかった。これは、文学部においては、留学生の受け入れや研究交流を通じての取り組みが進められてきたからである。これを基礎に、文学部としても全学的な国際化への取り組みと連動しながら、グローバル化に対応し、学部としてもいっそうの国際化を進展することが求められている。

### 1. 具体的な状況・背景

#### <英米文学科／フランス文学科／日本文学科／史学科>

各学科によって国際化への取り組みの内容には違いがある。これは英米文学科やフランス文学科と日本文学科の違い、また史学科における日本史と西洋史・東洋史の学問的な歴史、その社会的な役割の違いにもよっている。但し、文学部として、その教育の目的として、国際社会で通用する能力の育成はひろく了解されている課題であり、国外の大学との単位互換制度や教員・学生の交換制度などの拡大が検討される必要がある。

#### <英米文学科>

生活や文化、価値観、考え方の違う世界の人びととの共生を通じて社会に貢献できる人材の育成を目標とする英米文学科では、国際社会で活躍できる人材の育成を最も重要な理念の一つとしている。その理念を実現するために、英語を通じた文化・文学・語学・コミュニケーション・教育法を教授してきていることからわかるとおり、国際化には学科創設以来多大な配慮をしている。海外生活経験者を積極的に入学者として受け入れ、海外の諸大学との提携や協定に基づいて、長期・短期を問わず多くの学生を留学させている。また、教員の研究を通しての国際交流も盛んであり、国外の学会での発表を行う教員の数も毎年多く、国外で発行される学術誌の編集委員等を務める教員も複数を数えるほか、大小の国際学会を積極的に開催している。今後はさらに受け入れ態勢の充実をはかり、海外協定校からの留学生、外国人留学生入試による入学者を増加させることが課題であると認識している。

#### <フランス文学科>

フランス文学科は学科設立の理念に基づき、フランス、およびフランス語圏の国々との国際交流を重要な方針としている。フランスの協定校に毎年学生を留学させているが、そうした学生は他の学生にとっての刺激となり、新しい息吹を吹き込む重要な役割を果たしている。また、毎年フランスおよびフランス語圏の国々から著名な研究者を招聘し、講演会や国際シンポジウムを行っている。長期休暇を利用して研究のためフランスに行く教員も多く、フランスで著書を刊行したり、国際学会に参加したり、国際的な学術誌に論文を発表する教員も多い。

#### <日本文学科>

日本文学科は、国際的視野の養成という教育目標を掲げ、教育・研究における国際化を日本文学科にふさわしい方法で積極的に推進することをめざしている。

#### <史学科>

史学科では、世界史関係のコースがあり（西洋史、東洋史）、その結果、教育研究活動が国際化と連動しているため、国際化自体は自明のこととして意識されている。一般的な国際化の重要性の指摘

にとどまらない、国際化を支える実質的な枠組みの構築が課題として意識されている。こうした中で、学部レベルでも海外留学を経験する学生が増加している。一般的には英語圏への留学を通じて、英語力の向上を目的とする学生が多いが、近年の傾向としては、韓国や中国の東アジア地域、ヨーロッパでのドイツ語圏への留学の事例も見られる。これらは、学生が学部段階から自らの専門性を意識した結果であり、教員のサポートも含め、こうした動機づけの重要性は学科として共有されている。

## **2. 現在までの対処状況**

### **<英米文学科／フランス文学科／日本文学科／史学科>**

国際化への取り組みにはさまざまなレベルがあるが、文学部としての取り組みとしては、史学科を中心として進めた外国人研究者による特別講義や講演会の開催、教員や学生などの参加がある。2006年6月には、ハーヴァード大学歴史学部のデイヴィッド・アーミティージ教授による特別講義（「帝国の理論家ジョン・ロック？」）や講演会（「帝国の誕生——ブリテン帝国のイデオロギー的起源」）を開催した。前者の内容は、文学部『紀要』第51号、2010年に掲載されている。

### **<英米文学科>**

英米文学科では、国際化の一環として、大学が国際交流協定を結んで交換留学を実施している88校のうち42校を占める英語圏の大学を中心に、本学科からは毎年平均して5～6名以上の学生を交換留学生として送り出している。また認定校制度を利用して、あらかじめ大学が認定した海外の大学で履修した授業科目単位の認定を受ける学生も、例年数名いる。また、本学科では、夏期休業期間中に3週間にわたって実施されるオックスフォード大学ハートフォード・カレッジでの短期語学研修修了者に対する単位認定を行なっている。この語学研修は英米文学科が主催するものであり、参加資格者は全学の学生であるが、例年20名以上が本学科からこれに参加している。教員の国際交流も盛んで、頻繁に海外へ調査・研究・発表等のためおもむいているほか、海外の研究者が本学科教員・学生を対象とした講演会を催すことは、毎年必ず複数回を数えている。その大規模な例としては2008年5月に米国の著名な学者コーネル・ウェスト氏を青山学院大学が招いて開いた講演会を本学科が実務において担い、また2011年には第10回国際ミルトン・シンポジウムを本学科が主催して開くことになっている。

### **<フランス文学科>**

フランス文学科では、毎年15名程度の学部学生を協定校フランシュ・コンテ大学に留学させており、2004年度からは、パリ第3大学とも学術協定を結び、こちらには、大学院生を中心に2名程度の学生を留学させている。教員もまた、頻繁に渡仏し、図書館での資料収集、学会での研究発表などを精力的に行い、その成果をさらなる研究の発展やよりよい授業を実現するために役立てている。また、フランスの著名な研究者を招聘しての講演会、シンポジウムを数多く開催しているが、講演会については極力通訳をつけるようにし、シンポジウムについては同時通訳をつけるなどして、学部学生も積極的に参加できるよう配慮している。

### **<日本文学科>**

日本文学科では、毎年協定校への留学者1～2名、語学研修参加者数名があり、各学年に1～2名の外国人留学生在籍している。2004年度より国際シンポジウム（5年間連続開催）や外国人研究者の招聘講演をして開催しており、2006年にはコロンビア大学東アジア言語文化学科と学術協定を結び、教員間の交流が始まっている。また、教員の海外での調査・講演・研究発表なども盛んに行われるようになってきている。

### <史学科>

史学科では、外国人留学生入試を実施し、2010年度には、3名の留学生が入学したが、今後もいっそう多くの留学生を受け入れる条件と制度を整える必要がある。学生の留学（短期留学を含む）に加え、多くの教員が頻繁に海外で講演、調査研究、学会発表等を行っている。また、海外の研究者による本学科教員・学生を対象とした講演会も開催している。こうした活動はどうしても大学院にかたよりがちであるが、史学科では、本学を訪問した外国人研究者に学部でも特別講義や講演を依頼し、特に英語やその他の外国語で講演を行ってもらい、学生の興味関心を喚起するなどその活動を国際化させている。具体的には、2007年にパリ第一大学歴史学科の教授、2009年にはバーゼル大学名誉教授に講演やセミナーを依頼した。史学科の海外機関との連携作業としては、ロシア科学アカデミー極東支部諸民族歴史学・考古学・民俗学研究所との共同研究がまず挙げられる。この活動は1992年以来一貫して続けられてきた。1998年以降はクラスキノ土城の共同発掘と調査成果報告国際シンポジウムの開催、成果報告書の刊行が行われている。また、メキシコ・カンペチュ州エル・パルマール遺跡発掘調査団長に調査報告を依頼しているゼミもあり、個々の教員のレベルでも、国際的な学術交流のための努力が続けられている。

### 3. 今後の対処方法・課題

#### <英米文学科／フランス文学科／日本文学科／史学科>

各学科によって課題にも違いがあるが、共通の課題としては、国際交流、特に学生の交流のために交流協定を結ぶ大学をふやし、同時に、単位互換制度などをより整備することがあげられる。また、そうした交流の基礎には、学部組織としての国際交流のサポートなどが必要である。例えば、外国人研究者講演を行う際に資金的なサポートが柔軟に行われればよりいっそうの進展が期待できる。

近年、グローバル化の進展によって、国境をこえて教員が相互に授業を行うなどの機会が着実に増加している。授業期間中の海外渡航への規定の緩和などを通じてこうした活動への組織的なサポートがどうしても必要であろう。

#### <日本文学科>

日本文学科では、国際交流に関わる授業科目群の設置、外国人留学生の受け入れのためのカリキュラム改革と広報体制の強化を現在計画している。

## 執筆項目 17 入学定員数の管理

### 問題点・改善点

入学定員は、学生に対する適正な教育を行うための基本的な条件である。合格者の入学率の推移は流動的な部分もあるが、適正な水準をたもつための努力を払っている。

### 1. 具体的な状況・背景

#### <英米文学科>

英米文学科の入学定員 300 名、編入学定員：20 名（3 年次）に対して、入学者比率は、2009 年度

351/300=1.17、2010 年度 339/300=1.13 であり、編入学定員に対する入学者比率は、2010 年度 20/20=1.00 であり、ほぼ適正と考えられる。また、第二部英米文学科入学定員 100 名に対して、2009 年度 123/100=1.23、2010 年度 110/100=1.10 であり、ほぼ適正と考えられる。

#### <フランス文学科>

フランス文学科の入学定員は 128 名に対し、2010 年度の入学者数は 132 名であり、比率は 1.03 である。

#### <日本文学科>

日本文学科の 2009 年度の入学定員は 128 名、入学者数は 156 名で、比率は 1.22 である。

#### <史学科>

史学科の 2008 年度から 2010 年度までの 3 年間の入学者数は、152 名、149 名、167 名と推移してきている。入学定員は 129 であるので、2008、2009 年度は助言基準範囲内であったが、2010 年度に初めて一般入試を A、B 二つの種別に分けて実施したため、合格者数を決定するための前例がなく、受験生の動向の慎重な分析に基づいて決定を下したにもかかわらず、結果として入学者が定員の 1.29 倍に達してしまった。文学部全体の数値での判断となるため、全体としては基準範囲内であったが、より慎重な選考を行い、学科としても基準範囲内の入学者とするように努力する。

## **2. 現在までの対処状況**

### <英米文学科／フランス文学科／日本文学科／史学科>

各学科とも、ここ数年の入学手続者率を参考に、大学入学試験に関する情報や社会情勢を踏まえて合格判定を行い、一般入試、特別入試ともに、入試種別ごとに過去のデータに基づく慎重な合格者判定を行っている。また、指定校推薦入試で確保する学生の人数を調整弁として、入学定員数の管理に努めている。

## **3. 今後の対処方法・課題**

### <英米文学科／フランス文学科／日本文学科／史学科>

各学科に共通する課題として、これまでの入学定員の管理を継続しつつ、入学試験形態・種別の多様化に合わせ、入学者全体のバランスを十分に考慮することが必要である。

一部の学科が 2008 年度より大学入試センター試験を利用し、また、2010 年度より全学的な全学部日程入試を導入したため、入学定員数の管理にさらなる配慮が求められることとなる。

## **執筆項目 18 収容定員数の管理**

### **問題点・改善点**

収容定員は、入学定員と同様に学生に対する適正な教育を行うための基本的な条件である。適正な水準をたもつための努力を払っている。但し、近年の就職難によって留年する学生も増加し、また、新卒の方が就職活動に有利であるとの判断が一般的なため、あらたな問題状況も生まれている。

## **1. 具体的な状況・背景**

### **<英米文学科>**

英米文学科の収容定員 1,240 名に対する在籍学生総数 1,520 名で、在籍学生総数の比  $1,520/1,240=1.23$ 、第二部英米文学科同  $465/400=1.16$  (2009年5月1日現在) である。

### **<フランス文学科>**

フランス文学科の収容定員 512 名に対し、2010年5月現在の在籍者数は 640 名であり、収容定員の 1.25 倍となっている。

### **<日本文学科>**

日本文学科の 2009 年度の収容定員は 512 名、在籍学生数は 639 名で、比率は 1.25 である。

### **<史学科>**

史学科では、収容定員数が 516 名であるのに対し、ここ 3 年間の収容人数は 2008 年 654 名、2009 年 645 名、2010 年 656 名と推移している。入試制度の変更にもない入学者の判断が困難であった 2010 年には入学者自体は基準範囲を超える結果となったが、過去 5 年間の学生数の平均は 625 名であり、定員数の 1.21 倍となっている。

## **2. 現在までの対処状況**

### **<英米文学科>**

英米文学科の留年に関する数値は、1 年次生 1.68% (6/357)、2 年次生 4.58% (17/371)、3 年次生 0.56% (2/355)、4 年次生 15.38% (68/442)、第二部英米文学科 1 年次生 2.40% (3/125)、2 年次生 13.74% (18/131)、3 年次生 2.88% (3/104)、4 年次生 22.12% (25/113) である。4 年次生では、就職活動の継続を理由とする学生がかなり多い。また、外国への私費留学のために休学届けを出して結果的に留年する学生もある。これらを除くと、留年の理由は、おおむね勉強意欲の低下であると捉えている。勉強意欲の低下は、学習分野との不適合感や学習の困難、人間関係の困難、大学外での諸活動への度を越えた参加などであると捉えている。なお、第二部英米文学科の場合は、上に加えて勤務の事情の変化によって単位修得が困難をきたす学生が存在する。

### **<フランス文学科>**

フランス文学科は、2010年3月31日現在で、1 年次生の留年率 2.4、2 年次生 4.2、3 年次生 0.6、4 年次生 16.7% (小数点以下第 2 位を切り捨て) となっている。退学者数は、1 年次生 4 名、2 年次生 4 名、3 年次生 1 名、4 年次生 4 名となっており、進路変更が主な理由である。留年率、退学者数ともに決して高い数字ではなく、フランス語の高い運用能力を身につけた多くの人材を 4 年間で送り出すことに成功している。1 年次生は「文法」のクラス担当者、2 年次は「速読」担当者、3・4 年次は演習担当者が、意欲を失ったり進路に迷ったりした学生に対して、転学科・転学部を含め、個別にアドバイスを与えるように心がけている。

### **<日本文学科>**

日本文学科では、留年率は 1 年次生 0.6%、2 年次生 2.6%、3 年次生 1.8%、4 年次生 13.7% で、理由は、2 年次生は単位不足、3 年次生は休学、4 年次生は単位不足に加え、卒業延期などである。退学者は、1 年次 0 名、2 年次生 1 名、3 年次生 1 名、4 年次生 1 名で、理由は学修意欲の減退や進路の迷いと見られる。1 年次生は「文学研究法」のクラス担当者、2・3 年次生は演習担当者、4 年次生は特別演習担当者が、意欲を失ったり進路に迷ったりした学生に対して、転学科・転学部を含め、個別にアドバイスを与えるように心がけている。

### <史学科>

史学科では、編入者数が過去5年で7、4、3、3、6名となっており、就職難等による自主留年者数（2007年度1年1名、2年3名、4年14名、2008年度1年1名、2年3名、4年20名、2009年度1年1名、2年12名、3年2名、4年22名）が増えている。こうした傾向に対しては、2年次の基礎演習や3・4年次の演習・特別演習などにおいて教員による個別指導を行うことで自主留年者数の抑制に努めている。

### 3. 今後の対処方法・課題

#### <英米文学科／フランス文学科／日本文学科／史学科>

今後も、前年までの動向と当該年度の経済状況などを考慮し、定員割れ、定員超過を起こさない合格者数の決定に努力していくことが必要である。

また、各学科とも4年次生の留年は就職活動がうまくゆかないため、卒業を延期する学生が多いためである。史学科でも、こうした学生の動向に大きな関心を寄せており、分科会やワーキング・グループでも議論している。大学としては、こうした学生のために、卒業延期制度を導入したが、各学科としては、より個別的な把握が必要であろう。

#### <英米文学科>

英米文学科では、オフィス・アワーを制度化して学生個々の事情を教員が把握することに努め、退学につながるような状況の打開を支援している。また、毎年3月に複数の担当教員による「単位僅少者個別面談」を行い、退学につながる可能性のある学習不振などからの回復のため、事情を聞き助言を行っている。

#### <フランス文学科>

フランス文学科の場合、4年生の留年率が高いのは、もう1年就職活動をするために意図的に単位不足となっている学生が多いためであると考えられる。

#### <日本文学科>

日本文学科では、学生が容易に教員に相談できる環境を整えることと、現在以上に教員間で単位不足者や長期欠席者について情報を共有することが必要と考えている。

## 執筆項目 21 キャリア教育の充実

### 問題点・改善点

大学教育の目的は、第一に学力や資質の向上をはかることであり、その結果として社会に貢献できる人材を養成することを通じて社会的な位置を確保してきた。しかし、近年では、大学教育に卒業後を想定した教育が養成されている。その意義は大きいだが、同時に、単に就職のための活動とすることなく、幅広い職業選択を可能にしたり、学生が自らの勉学の意味をあらためて考えることが可能になるような機会を提供すべきである。

## **1. 具体的な状況・背景**

### **<英米文学科／フランス文学科／日本文学科／史学科>**

文学部共通科目として、人文学研究と現実社会との接点、人文学の有効性や意義を検討する「現代社会と文学部」を開設した。これは学部としてのキャリア教育の一環とすることができよう。

### **<英米文学科>**

英米文学科では、英語の運用能力の教育を通じて、社会に貢献できる人材を養成するという学科の目標は、学生の側から見るなら、個々の学生のキャリアの中で活用することのできる英語運用能力の確認と獲得がうながされるということである。したがって、本学科は広い意味でのキャリア教育を学科目標としていると言える。ただし、狭義でのキャリア教育について、学科としての意思確認が十分に行われているとは言えない。

### **<フランス文学科>**

フランス文学科では、新入生を青山フランス文学会の会員とし、文学会主催の講演会等への参加を通じ、キャリア意識を促している。

### **<史学科>**

史学科では、2006年度以降、史学科校友会と連携し、毎年1、2回のペースで様々な分野で活躍する卒業生による講演会および相談会を実施するようになった。

## **2. 現在までの対処状況**

### **<フランス文学科>**

フランス文学科では、青山フランス文学会の母体として、毎年、卒業生を招き、講演会を主催することで、学生のキャリア意識を高めようと努力している。また、『青山フランス文学会報』に掲載すべく卒業生インタビュー等を学生に行わせることもキャリア教育となっている。

### **<日本文学科>**

日本文学科では、学生の進路相談や就職指導は、特別演習担当者が適宜行っている。しかし、日本文学科にふさわしいキャリア教育の先例も少ないため、初年次からの組織的キャリア教育については、現在模索している段階にある。なお、日本文学科卒業生の会による就職案内も行われている。

### **<史学科>**

史学科の場合、社会科教員を除くと、進路が特定の業種に固定する傾向が小さいため、講演会・相談会を通じて第一線で働くOB・OGたちの生の声を聞くことで、学生たちは卒業後の進路の広がりを実感できるようになりつつある。

## **3. 今後の対処方法・課題**

### **<英米文学科／フランス文学科／日本文学科／史学科>**

各学科、あるいは文学部などにおいて、講演会などを催すときに卒業生を呼んで、現役の学生との交流の場を持つなどの工夫がさらに求められることになるろう。

### **<史学科>**

史学科のあるゼミでは、本年度試験的に、卒業生の勤務する企業に2・3年次の学生を連れていき、人事担当者から説明を受けさせた。学生の声を聞いたうえで来年度以降も開催可能性を探っていく。

## 執筆項目 22 教員組織や教員の教育・研究活動などの適切性

### 問題点・改善点

「大学設置基準」などに準拠して、各学科は適正な教員数の確保を行う必要がある。また、教員の年齢構成に関しても、そのバランスに留意する必要がある。大学基準協会の認証評価では、文学部に対しては、教員組織に関しては特段の助言はなかったが、年齢構成に関してはそのバランスに留意すべき旨の助言があった。

### 1. 具体的な状況・背景

#### <英米文学科>

大学設置基準によると、英米文学科の必要専任教員数は13、第二部英米文学科は4であり、設置基準上必要とされる英米文学科および第二部英米文学科の専任教員数は17である。英米文学科の専任教員数は33であるので、設置基準で定められた教員数は確保されている。ただし、これは英米文学科および第二部英米文学科の学生収容定員のみを考慮した数字であり、英米文学科は、英米文学科と第二部英米文学科の英語教育と専門教育に加えて文学部全体の英語教育に責任を持って担っていることを言い添えておかねばならない。

#### <フランス文学科>

フランス文学科には現在15名の専任教員（うち専任待遇2名）が所属しており、これは学科の設置基準上必要な専任教員数7名を満たすものである。教員の研究領域も、中世から現代までのフランス文学、思想、言語、文化を網羅している。

#### <日本文学科>

日本文学科は15名の専任教員で構成されており、大学設置基準上必要な7名を確保している。

#### <史学科>

史学科では、学部の教養系科目の再編にともなう異動によって専任教員を受入れた経緯があり、現在まで設置基準をこえる教員を有している。そのため、ここ10年ほどのあいだは教員組織には大きな変更を加えていない。それは、教員の5コース（日本史・東洋史・西洋史・考古学・芸術史）への配置と学生のニーズとのずれが比較的小さく抑えられてきたことによる。この点に関しては、各コースの人員構成のバランスに配慮しつつ、専任19名（助手1名を含む）を基礎に適正規模の人員の確保を図ってきた。しかし、2012年4月より、1～4年の学生全員が渋谷キャンパスで学ぶことになると、教室の絶対数の不足、適切な大きさ・設備の教室の不足などが予想されるため、現行5コース体制の変更を視野に入れた検討をせざるをえない。

### 2. 現在までの対処状況

#### <英米文学科>

英米文学科では、2010年度の専任教員は定員34名で内欠員1名。33名の分野別専門領域は、イギリス文学・文化9名（うちグローバル文学・文化担当1名）、アメリカ文学・文化8名、英語学8名、コミュニケーション6名、英語教育学2名であり、ほぼ適正な配分であると考えているが、より適正な配分をつねに模索していく必要がある。なお、教員の男女比は22：11。年齢別構成は30歳代1名、40歳代10名、50歳代12名、60歳代10名。日本語を母語とする教員27名、英語を母語とす

る教員 6 名である。年齢別構成については、やや高年齢の教員に傾いてきているくらいがあるので、適正な配分を志向する必要があると認識し、新任人事の際には若手の能力ある教員を採用することに可能な限り努めている。

こうした状況の中で、英米文学科の専任教員の授業担当比率は、英米文学科の専門科目においては 41.5%、外国語科目においては 9.21%、第二部英米文学科の専門科目においては 58.02%、同外国語科目においては 3.19%となっている。特に外国語科目において専任の担当比率を上昇させる必要が学科内で認識されている。他方、本学科専任教員の授業担当コマ数は、平均で 7.5 コマとなっており、良好な教育・研究活動が保証されるためにほぼ適切な範囲にあるとはいえ全学平均よりは高く、これ以上個々の専任教員が授業担当コマ数を増加させることは困難であろう。授業時間外での学生指導については、オフィス・アワーを制度化して個々の学生の学習上その他の相談に乗るほか、学生と教員との教室外での交流を積極的に推進する伝統的な気風を重んじて、学生の大学生活を支援し、有意義なものにすることに努めている。

#### <フランス文学科>

2010 年現在、フランス文学科の開講コマ数は 122 であり、専任教員の担当総コマ数は 68 と過半数を占めており、適切である。各種委員会など諸委員の分担についても、平等な負担となるよう配慮されている。授業外での学生への指導については、とくにオフィス・アワーなどの制度を設けているわけではないが、学生の求めに応じて随時行われている。とりわけ、卒業論文の指導については、授業外での学生個人に応じたきめ細やかな指導が行われている。男女比率は、男性 10 名、女性 5 名の 2 対 1 で適正である。年齢構成もまた、60 代 3 人、50 代 4 人、40 代 4 人、30 代 4 人と大変バランスがとれている。

#### <日本文学科>

日本文学科は、日本語・日本文学に関わる分野を網羅する教員配置となっており、教員の任用に当たっては年齢構成や性別なども十分に考慮している。質の高い教育・研究活動を行うために、授業担当コマ数も適切なものとしている。演習を中心として、授業時間外での学生への相談・指導も随時行っている。学内・学科内の諸委員も均等に分担している。2009 年 4 月 1 日現在、60 代 3 名、50 代 7 名、40 代 4 名、30 代 1 名、男性 12 名、女性 3 名となっている。2009 年度の専任教員の授業コマ数は平均 6.61 コマである。

#### <史学科>

史学科では、教育・研究活動に関しては、各教員が科研費や学内助成金などを獲得する努力をほらうとともに、教育内容の充実と個人研究・共同研究の進展を図ってきており、今後もこの方向で活動を継続していく所存である。また、2010 年度より、コースから各 1 名の教員を出し、学科主任も加わり、2012 年問題に対応するためのワーキング・グループを発足させ、対応を協議している。年齢構成は、60 歳代 7 名、50 歳代 7 名、40 歳代 4 名となっており、かたよりが見られる。定年退職に伴う新規人事に際しては、若手研究者の積極的採用が望まれる。人員配置においては、その領域や研究手法に配慮しながら、他方、全体としての年齢構成の平準化をワーキング・グループの課題として検討している。なお、史学科の場合、学科科目に加え、入学試験関連業務の肥大化や 43 科目ある文学部共通科目や 17 科目のコーディネート（非常勤の手配＋講義内容の調整）業務の増大が研究・教育に支障をきたしつつある点は懸念材料である。

授業時間以外での学生への対応に関しては、史学科の場合、ゼミナールでの指導をもとに個別的な対応を行っており、また、授業の範囲をこえた博物館などの見学の機会をとらえてその充実をはかっ

ている。

### 3. 今後の対処方法・課題

#### <英米文学科／フランス文学科／日本文学科／史学科>

学科により違いがあるが、文学部全体としては年齢構成に若干の偏りがみられる。今後ともその改善に留意する必要がある。

なお、全体学科に共通する課題として、大学業務の多様化により、学内・学科内の委員の種類が増え、負担が大きくなっている。この中には、入試制度の多様化にともなう入試関係業務の負担ももちろん含まれている。管理運営業務負担は、教育・研究業務に支障をきたす寸前にまで達しており、個々の教員の懸命の努力によって現実の支障が生じるのをからくも回避しているのが実情であると言える。委員の業務のマニュアル化と、その検討による委員の統廃合が必要である。諸委員の負担の軽減を行い、教育・研究にあてる時間を増やす方策が講じられることが必要である。

## 執筆項目 23 専任教員 1 人あたりの学生数

### 問題点・改善点

専任教員 1 人あたりの学生が適正であることは、学生の教育のための基本的な条件である。

### 1. 具体的な状況・背景

#### <英米文学科>

2009 年度における英米文学科在籍学生数 1,520 名、同じく第二部英米文学科在籍学生数 465 名、計 1,985 名であり、本学科専任教員数は 34 であるので、専任教員 1 人あたりの学生数は、58.38 となる。やや大きな数字であると考えられる。2010 年度入試をもって第二部英米文学科の募集を停止したので、今後この数字は改善に向かうことが確実である。各種の方策を講じて留年の防止に努めていくことは言うまでもない。

#### <フランス文学科>

フランス文学科の場合、2010 年 5 月 1 日現在、教員 1 人あたりの学生数は 42.6 であり、適正である。ただし、在外研究等で毎年 1 人は教員の数が減ることを考えると、教員 1 人あたりの実質的な学生数は 45.7 となり、若干負担増となる。3・4 年生を対象とした演習における、履修者数の極端なバラつき（多いところでは 40 名を超える履修者がある）の解消が課題である。

#### <日本文学科>

日本文学科では、収容定員数 512 名に対して専任教員数 15 名で、専任教員 1 人あたりの学生数は 34.1 名である（2009 年度の在籍学生数 639 名で計算すると 42.6 名）。専任教員 1 人あたりの学生数は適切であり、日本文学科の特徴である少人数教育を円滑に行うことができている。

#### <史学科>

史学科では、収容定員数 516 名に対して専任教員 18 名で、専任教員 1 人あたりの学生数は 28.6 名（2009 年度の在籍学生数でいうと 35.8 名となる）である。史学科は専任教員 1 人あたりの学生数は

適切であり、研修旅行・卒論必修など学科独自の少人数教育を円滑に実施できている。

## **2. 現在までの対処状況**

<英米文学科／フランス文学科／日本文学科／史学科>

各学科のよって状況はことなるが、一定の限度の中におさまっている。しかし、これは、学生数という面でのみ問題にした場合であり、教員の行政的な負担が増加すれば相対的に条件は悪化する。その意味では、現在の状況は決して楽観できるものではないといえるであろう。

## **3. 今後の対処方法・課題**

<英米文学科／フランス文学科／日本文学科／史学科>

これまでの在籍学生数の管理を継続し、少人数教育を行える体制を維持してゆくことが課題である。

# 執筆項目 24 自己点検・評価活動の実態

## 問題点・改善点

2006年の自己点検・評価報告書の作成過程で、それまで気づかなかった問題点が明らかになり、各学科で問題を議論し、それぞれの専門領域の特徴を生かしながら、問題の解決に取り組むようになった。

## **1. 具体的な状況・背景**

<英米文学科／フランス文学科／日本文学科／史学科>

各学科は、大学全体で行われる自己点検・評価活動の中で、自己点検・評価を行っている。

## **2. 現在までの対処状況**

<英米文学科／フランス文学科／日本文学科／史学科>

自己点検・評価報告書は、各分科会での議論をふまえて作成されるため、問題点の共有のもとに課題の解決に向けての具体策が検討されることになる。

<フランス文学科>

フランス文学科では、学科内に学部と大学院をそれぞれ担当する2名の自己点検・評価委員を置き、学部内の自己点検・評価委員会と緊密な連携を取りつつ作業している。

2007年度に認証評価申請を行うために作成した報告書については、学科の構成員全員による協力体制をしき、分担執筆を行うことで、共通の問題意識を育てることができた。

## **3. 今後の対処方法・課題**

<英米文学科／フランス文学科／日本文学科／史学科>

学科に共通する課題として、全学自己点検・評価委員が中心になって作成した評価案を分科会で検討しつつ、教員間で問題点を共有し、カリキュラムや履修指導の改善などを行うことがあげられよう。

課題の解決に向けて、引き続き努力が必要である。

#### <フランス文学科>

フランス文学科では、今回は、前回とは違う教員が、全体の指揮を取り、学科内の意見をとりまとめることで、合意が形成されている。前回の報告書で明らかになった課題を解決すべく、またフランス語科目や専門科目をより効果的なものとするべく、新カリキュラムの策定に着手している。